

『孟子逢原』訳注（1）

The Translation and Annotation of *Moushi Hogen* (1)

FUJII Taketo

藤居 岳人

はじめに

中井履軒（一七三二—一八一七）は、江戸時代中期から後期にかけて大坂に存した漢学塾の懷徳堂に関係する儒者である。彼は、「孔子の道を伝うるは、唯だ論語・孟子・中庸の三種のみ」（『孟子』公孫丑篇の『孟子逢原』に見える）と述べて、儒教の経書の中でこの三書を重んじる。そして、これらに対して、『逢原』と題した注釈を残している。『逢原』は南宋の朱子撰『四書集註』（以下、『集註』と称する）のテキストの余白に、『集註』の内容を批判しつつ、みずからの見解を記したものである。本稿では、その中で『孟子逢原』の「集註序説」の箇所を取り上げて、履軒による経書注釈の様相の一斑を明らかにしたい。特に後半の性論に関する箇所は、朱子学に対する履軒の基本的立場を明確に示しており、重要である。なお、『孟子逢原』の底本は、『孟子』本文と『孟子逢原』とが抜粋されており、『集註』は見えない。しかし、『孟子逢原』は、『集註』に対する批判を多く含んでいるために、本稿では、『集註』との対照に便利になるよう、『孟子逢原』には見えない朱子の注釈も取り上げた。

〈凡例〉

一、本稿は中井履軒撰『孟子逢原』の「集註序説」の書き下し文・現代語訳・注である。ただし、現代語訳は、『孟子逢原』の部分のみである。朱子の「集註序説」の現代語訳や注については、鈴木由次郎他『四書集注（下）』（朱子学大系第八巻、明德出版社、一九七四年）を参照のこと。

二、『孟子逢原』の原文は、関儀一郎編『日本名家四書註釈全書』（東洋図書刊行会、一九二二—一九三〇年）（鳳出版、一九七三年、復刻）所収本を底本とした。以下、「全書本」と称する。また、適宜、大阪大学附属図書館懷徳堂文庫所蔵の中井履軒自筆本を参照した。以下、「自筆本」と称する。

三、『孟子逢原』には見えない『孟子集註』は、中井履軒自筆の『孟子雕題』が書き込まれた書林両銭堂刊の三刻朱熹『孟子集註』を底本とする。これは大阪大学附属図書館懷徳堂文庫所蔵である。以下、「雕題本」と称する。なお、『孟子逢原』には見えない『孟子集註』は、「雕題本」では小字で記されており、その『集註』は【】内に記す。

四、『孟子逢原』の部分は二字下げて記して、その後に現代語訳を続ける。
五、漢字はほぼ常用漢字、かな遣いは現代かな遣いを用いた。なお、書き下し文・現代語訳中の()は、その前の語の意味を表わし、〔 〕は、文意をわかりやすくするために筆者が補った語を示す。

孟子逢原

水哉館学

集註序説

○『史記』の『孟子荀卿』列伝に曰く、「孟軻は【趙氏曰く、「孟子、魯の公族の孟孫の後なり」と。『漢書』の『芸文志』の注に云わく、「字は子車」と。一説に、「字は子輿」と。】騶人なり。【騶 亦た鄒に作る。本と知の国なり。】業を子思の門人に受く。【子思は、孔子の孫。名は伋。『史記』索隠に云わく、「王劭は人を以て衍字と為す」と。而して趙氏の注及び『孔叢子』等の書も亦た皆な云わく、孟子 親ら業を子思に受く。未だ是や否やを知らず。】

「門人」は衍字に非ず。然れども其の年紀より推せば、孟子 業を受くるの人も、亦た親ら業を子思に受くることを得ず(1)。孔氏の人の若きは、則ち子思の孫なり。方に孟子の師為るを得るのみ。諸家の「親ら受くる」の説 皆な謬りなり。且つ(『孟子』七篇中に、全く述ぶる所無し(2)。而して曰く、「孟子」離婁下篇に)「私かに諸を人に淑くす」と。則ち亦た常の師無し。『史記』も亦た流伝の言(3)を録するのみ。明扼有るに非ず。

『史記』世家の年表を按ずるに、孔子卒する自り、斉 燕を取るに至るまで、百六十六年を得(4)。是の時孟子は既に老境に入る。而して子思の生、孔子卒するの前に在り。子思 寿百歳を踰えるに非ず。孟子の誕生に遭うこと能わず。亦た安くんぞ得て之を師とせんや(5)。

〈現代語訳〉

「門人」は衍字ではない。しかし、その年代から推測すれば、孟子が学問を受けた師も、直接に子思から学問を受けることはできなかったはずである。子思の門人と言うのは、子思の孫のことであろう。「そのように考え

れば、年代的に」まさに孟子の師であることが可能になる。諸注釈家の「孟子が子思に」直接教えを受けた」という説は皆な誤りである。そのうえ『孟子』七篇の中に、子思について学んだとは一言も述べていない。さらに、孟子自身が「孟子」離婁下篇に「孔子の学を」ひそかに人から学んだ」と言っている。すると孟子には常に師事していた師はいなかった。『史記』は世間に伝わっている話を記録しているだけで、明らかな根拠があるわけではない。

『史記』孔子世家の年代を勘案すれば、孔子が亡くなってから、斉が燕を征服するに至るまでの間は百六十六年である。この時 孟子はすでに老境に入っている。そして、子思が生まれたのは、孔子が亡くなるよりも前である。また、子思の寿命は百歳を超えてはいなかった。従って、孟子の誕生を見ることができなかった「はずである」。どうして孟子が子思を師とすることができようか。

道 既に通ず。【趙氏曰く、「孟子は五経に通じ、尤だ詩書に長ず」と。程子曰く、「孟子曰く、『公孫丑上篇に』『以て仕う可くんば則ち仕え、以て止む可くんば則ち止め、以て久しくす可くんば則ち久しくし、以て速やかにす可くんば則ち速やかにす』(るは、孔子なり)『万章下篇に』『孔子は聖の時なる者なり』と。故に易を知る者は孟子に如くは莫し。又た曰く、『離婁下篇に』『王者の迹熄んで詩亡び、詩亡びて然る後に春秋作る』と。又た曰く、『尽心下篇に』『春秋に義戦無し』と。又た曰く、『滕文公下篇に』『春秋は天子の事なり』と。故に春秋を知る者は孟子に如くは莫し」と。尹氏曰く、「此れを以て言えは、則ち趙氏の『孟子は詩書に長ず』とのみ謂うは、豈に孟子を知る者ならんや」と。】

孟子 春秋を略論すと雖も(6)、而れども易は一言も無し(7)。又た七篇中に、詩書を援くこと頻頻たり(8)(9)。義も又た精微を尽くす。故に趙氏曰く、「五経に通じ、尤だ詩書に長ず」(10)と。他経に通ぜざるを謂うに非ず。尹氏 之を誦るは、非なり。夫れ程子の玩味の卮言(11)、稍機鋒有り(12)。以て正解と為し難し。尹氏は則ち声に吠する(13)者にして、豈に孟子を知る者ならんや。

仕・止・久・速・聖の時、是れ孔子の事なり。孟子 之を追述するのみ。正に『論語』の「里仁篇の」「適も無く莫も無し」、「微子篇の」「可も無く不可も無し」と合う。則ち孔子を謂いて易を知ると為すは、可なり(14)。

而れども孟子は与せず。若し此れに拠りて孟子を称して易を知ると為さば、則ち是れ孟子 易の理を推して、用て孔子の徳を褒賛す。豈に是の理有らんや。機鋒卮言の事を害すること此くの如し。

〈現代語訳〉

孟子は『集註序説』に紹介するように、『春秋』についてその考えの概略を述べているけれども、『易経』については一言も触れていない。また、『孟子』七篇中に、しばしば『詩経』『書経』を引用しており、その義理に関する議論もまた非常に精緻である。従って、趙岐が孟子に対して、「五経に通じ、とりわけ詩・書に長じている」と言うのは、『詩経』『書経』のみに通じていて、他の経書に通じていないと言っているのではない。尹焞が『孟子』が『詩経』『書経』のみに通じていると趙岐が言っている」と趙岐を批判するのは間違っている。「上述の尹焞説を引く」程子の自分勝手な議論は、やや口が滑って、的外れの嫌いがあるから、正しい解釈とはしがたい。尹焞は(程頤の門人で)程子に雷同して説を述べているだけであって、孟子を本当に知っている者とは言えない。

『孟子』公孫丑上篇に「仕えるべきときに仕え、止めるべきときに止め、官位に長く留まるべきときには留まり、官位を速やかに退くべきときには退く」とあり、『孟子』万章下篇に「聖人の中で時宜を心得ている」とあるのは、『孟子』のことを言うのではなく、孔子の事である。孟子は孔子を追述しているだけである。『孟子』に見える孔子の記事は「まさしく『論語』里仁篇の「肯定するだけでなく、否定するだけでもない」、『論語』微子篇の「可もなく不可もなし」「(に見える孔子の精神)」と合致している。従って、「時勢の変化をよく理解しているから」孔子を『易経』を知る者とするのは良い。しかし、孟子は『易経』とは無関係である。もしこれによつて孟子を『易経』を知る者とするならば、それは孟子が『易経』の義理を推測して、孔子の徳を褒め称えたということであつて、孟子が『易経』の義理を理解していたということではない。『程子による』舌の滑った言葉・自分勝手な議論が事実をそこなうことはこのようである。

齊の宣王に游事す。宣王 用いること能わず。梁に適く。梁の恵王 言う所を果たさず。則ち見て以て迂遠にして、而して事情に闇なりと為す。【史記を按ずるに、梁の恵王の三十五年乙酉、孟子 始めて梁に至る。其の後二十三年、

齊の湣王の十年丁未に当たり、齊人 燕を伐つ。而して孟子 齊に在り。故に『蘇轍の』『古史』に謂えらく、「孟子 先ず齊の宣王に事え、後に乃ち梁の恵王・襄王・齊の湣王に見ゆ」と。独り『孟子』に燕を伐つを以て宣王の時の事と為す。『史記』『荀子』等の書と皆な合わず。而して『資治』通鑑に燕を伐つの歳を以て、宣王の十九年と為すは、則ち是れ孟子 先ず梁に遊び而る後に齊に至つて宣王に見ゆ。然れども『資治』通鑑の考異も亦た他の拠無し。又た未だ孰れか是なるやを知らず。】

世家の年表を按ずるに、齊の宣王の即位は、魏の襄王の三年に当たる(15)。則ち宣王と恵王と、世に並ばず。世家に、「恵王の三十五年、孟子 梁に至る」と。是れ先に梁に適き、後に齊に適くなり。則ち梁の恵(王)の国を利するの問い、開卷第一に在るは、義において尤だ順なり(16)。

孟子 梁の襄王に見ゆ。梁恵章の下に次ず。是れ恵王死して、而して襄王立つるの時なり。然らば則ち孟子 梁を去るは、襄王の世に在り。

宣王の立つること十九年、燕を伐ちて之を取る(17)。燕の齊に入りて、湣王死するに至るまで、三十有一年なり(18)。蓋し燕を取るの後に、宣王死して、而して湣王立つ。此くの如く事勢尤だ順なり。世家の年表、蓋し皆な謬るのみ。後人 其の謬りを承け、反つて疑いを七篇の書に致すは、非なり。

孟子 七篇を著わすは、蓋し其の末年に在り。則ち齊梁の諸諡、皆な紀す可し。後人の加うる所に非ず。

〈現代語訳〉

『史記』魏世家の年代を勘案すれば、齊の宣王の即位は、魏の(恵王の跡を継いだ)襄王の三年に当たる。従つて、『齊の』宣王と『魏の』恵王とは同時に在世することはなかった。『史記』魏世家に、「恵王の三十五年、孟子が梁に至る」とある。これは『孟子』が「先に魏に行き、その後、齊に行ったことを示している。従つて、魏の恵王が魏国に利益となるようなものは何かと孟子に言つた問いが『孟子』の巻頭にあるのは、『史実の順に沿っているのであつて』その意味を考えれば、はなはだ理に適っている。

孟子が魏の襄王に謁見した記事は、魏の恵王に謁見した記事の次に置かれている。これは恵王が亡くなって、その後、襄王が立ったことである。とするならば、孟子が魏を去つたのは、襄王の世のときである。

〔齊〕宣王が立つてから十九年して、〔齊〕燕を征服してその領土を奪った。燕が齊の支配下に入って、〔齊の〕湣王が亡くなるに至るまで、三十二年である。思うに、〔齊が〕燕を征服した後に、宣王が亡くなって、湣王が立ったのであろう。このように事勢の流れは、はなはだ理に適っている。思うに、『史記』田敬仲完世家の年代は、全て誤りであろう。後世の人がこの『史記』の誤りを受けて、かえって〔年代に関する〕疑いを『孟子』の書に向けるのは間違っている。

思うに、孟子が『孟子』七篇を著したのは、その晩年であろう。従って、齊・魏の王の諡は、『王が皆なくなっているのだから』全て記していい良いのである。後世の人が勝手に書き換えたのではない。

是の時に当たりて、秦 商鞅を用い、楚・魏 呉起を用い、齊 孫子・田忌を用い、天下 方に合従連衡に務め、攻伐を以て賢と為す。而して孟軻は乃ち唐虞三代の徳を述ぶ。是を以て如く所の者 合わず、退き而して万章の徒と、詩書を序し、仲尼の意を述べ、孟子七篇を作る」と。【趙氏曰く、「凡そ二百六十一章、三万四千六百八十五字」と。韓子曰く、「孟軻の書、軻の自著に非ず。軻既に没して、其の徒の万章・公孫丑 相与に軻の言う所を記すのみ」と。愚按ずるに、二説同じからず。史記 是に近し。】

按ずるに商鞅の死(19)は、孟子 梁に適くの前二年に在り。呉起は則ち前四十五年に在り。孫臏・田忌も、亦た皆な既に死す(20)。伝文は切当ならず。

七篇 孟子の自著なること、疑いを容るること無し。万章の徒、恐らくは一辞も賛すること能わず。韓説微無し(21)。註に当に采入すべからず。

〈現代語訳〉

思うに、商鞅が亡くなったのは、孟子が魏に赴く二年前であった。呉起が亡くなったのは、孟子が魏に赴く四十五年前であった。孫臏・田忌も、ともにすでに亡くなっている。従って、「孟子の活躍していた時期に皆な全て亡くなっているのだから」『史記』の内容は適当ではない。

『孟子』七篇が孟子の自著であることは、疑いない。万章の徒は、恐らく『孟子』に一言も書き加えることはできなかっただろう。『孟子』が孟子の自著ではないという 韓愈の説は証拠がない。従って、注釈に取り入れるべきではない。

○韓子曰く、「堯は是れを以て之を舜に伝え、舜は是れを以て之を禹に伝え、禹は是れを以て之を湯に伝え、湯(22)は是れを以て之を文・武・周公に伝え、文・武・周公は之を孔子に伝え、孔子は之を孟軻に伝う。軻の死するや、其の伝を得ず。荀と楊とは、扱び而して精しからず。語り而して詳しからず」と。【程子曰く、「韓子の此の語、是れ前人を踏襲するに非ず。又た鑿空して撰んで得出するに非ず。必ず見る所有り。若し見る所無くんば、伝うる所の者何事を言うを知らず」と。】

『原道』の全文なり(23)。是れ字は上文の仁義の道を承けて言う。其の義明白なり。径蹊 迷う可きこと無し(24)。程子乃ち言わく、「伝うる所何事ぞ」と。怪しむ可し。蓋し徒らに是の数句を摘誦して、玩味す。扞言此れに由りて出るのみ。達論に非ず。且つ其の機鋒 厭う可し。

〈現代語訳〉

韓愈の『原道』の全文である。この文は、上文の仁義の道を承けて言っており、その意味は明白である。その道筋で迷うことはない。それに対して、程子は、「その伝える対象は何であるか明確ではない」と言うのは、怪しむべきである。思うに、いたずらにこの数句を摘出して述べて、自分勝手にもてあそんでいるだけである。〔程子の〕いい加減な議論がこれによって生じている。これは良い議論ではない。〔程子の〕舌の滑った言葉は聞くに堪えない。

又た曰く、「孟氏は醇乎として醇なる者なり(25)。荀と楊とは、大醇而して小疵あり」と。【程子曰く、「韓子 孟子を論ずるは甚だ善し。孟子の意を見得するに非ざれば、亦た道に到らず。其の荀・楊を論ずるは則ち非なり。荀子極めて偏駁にして、只だ一句の性悪、大本 已に失わる。楊子 過少なしと雖も、然れども亦た性を識らず。更に甚の道を説くや」と。】

斯の言 非とす可きこと無し。荀(26)〔子〕は偏駁と雖も、而れども大抵仁義の説を執る。之を老・莊・申・韓に比すれば、亦た愈らずや。之を醇と謂うも亦た可なり。偏駁は其れ疵なり。而して性悪は疵の首なり。大小 其の多少分数を以て言えば、醇七八にして疵二三、是れなり。学者或いは謬解して、「大醇」を至醇と為す。故に疑い多し。

楊〔子〕は性説明らかならずと雖も、而れども大抵儒者の面目を失わず(27)。刑名五行の異端と大いに異なり。故に亦た醇名を得るのみ。

二子の性説差有りと雖も、他説の若きは皆な孔孟の道に合う。斯ち可なり。唯だ其れ能くせざるが(28)故に尚ぶに足らざるのみ。其れ合わざるも、亦た必ずしも性説の差を以てするに非ず。程子言わく、「更に甚の道を説くや」と。頗る過当なり。是の語に据るや、是れ堯舜孔子の道、性を含^おいての外(29)、言う可きこと無し。豈に其れ然らんや。堯典・皋陶謨、尚書の冠冕(30)為り。而れども一の性字無し。古詩三百篇も、亦た性字無し。易六十四卦も、亦た性字無し。春秋二百四十年も、亦た性字無し(31)。性字を題せざるも、道亦た明らかにす可き者有るを知る可し。但だ偽濫の書(32)、伝註の文、乃ち多く性を論ず。豈に尚ぶに足らんや。但だ孟子性を論じて、則ち大功有るのみ。当に別論すべし。

夫れ性は、孔子の罕に言う所にして(33)、人人(34)も之を^{かまひ}聴くするに非ず。蓋し「性を識らざる」も、亦た大害無きことを以てが故なり。後世の学者、唇を焦がし舌を弊^{つか}れしめて(35)、朝夕に性を論ず。恐らくは善く孔子を学ぶ者に非ず。

〈現代語訳〉

「韓愈の」この言葉は、「程子の言うように」誤りだとすべき点はない。荀子は確かに偏っており雑駁ではあるけれども、たいてい仁義の説を保持している。これを老子・莊子・申不害・韓非子に比べれば、なんと勝っていることだろうか。荀子は純粹だと言っても良い。「荀子が」偏っており雑駁であるのは欠点であり、「その中でも」性悪説を説くのは欠点の最たるものである。大小多少をより具体的に言えば、「儒家の説を説く」純粹度が七、八割で欠点が二、三割といったところである。学者が誤解して、「韓愈が言った」「大醇」を完全な純粹(の意だ)とした。その故に疑いが多いのである。

楊雄は、その性説が明らかではないけれども、たいてい儒者の面目を失ってはいない。刑名を説く法家・五行説を説く陰陽家などの異端と大いに異なっている。だから、「荀子と同様に楊雄も」純粹だという名称を得ているだけである。

しているとは言えないけれども、必ずしも性論の違いから「孔孟の道に」

異なるとしているのではない。程子が「荀子・楊雄に對して」「さらに何の道を説いているのかわからない」と言うのは、全く当たっていない。この程子の語に従うならば、堯・舜・孔子の道は、性をおいて他に言うべき内容はない(「ということになる」)。しかし、そのように言うのはおかしい。堯典・皋陶謨は、『書経』の中で最重要の篇である。しかし、一つとして性の字は見えない。『詩経』の三百篇にもまた性の字は見えない。『易経』の六十四卦にもまた性の字は見えない。『春秋』の二百四十年の間にもまた性の字は見えない。性の字がなくても、道を明らかにできる書があることを知るべきである。ただ、道から外れた内容の書や經書の注釈の文などは、多く性について論じている。これらは尊重するに値しない。孟子だけが性について論じて大いに功績があるのみである。これは別に論じるべきであろう。

そもそも性は、孔子があまり言及しなかったことで、元来、人々も議論することがなかった。思うに「性を知らない」としても、大きな害のないことがその理由であろう。後世の学者が朝夕に、ああでもないこうでもない性と性について議論するのは、恐らく孔子の学を十分に学ぶ者とは言えないであろう。

又た曰く、「孔子の道、大にして能く博し。門弟子^{あまね}徧く觀て尽く識ること能わず。故に學んで皆な其の性の近き所を得。其の後に諸侯の国に離散し分処して、又た各おの(36)其の能くする所を以て弟子に授く。源遠くして末益ますます分かる。惟だ孟軻は子思を師とす。而して子思の学、曾子より出ず。孔子没して自り、独り孟軻氏の伝其の宗を得。故に聖人の道を觀るを求むる者は、必ず孟子自り始む」と。【程子曰く、「孔子は『参や魯なり』と言う。然れども顔子没するの後に、終に聖人の道を得る者は、曾子なり。其の手足を啓く時の言を觀れば、以て見る可し。伝うる所の者は子思・孟子にして、皆な其の学なり」と。】

「子思を師とす」、是れ流伝の謬りなり。前に已に之を論ず。

道統の論、嚆矢を此に發す。然れども韓子、略(37)流伝の説に遵う。而して其の源流を推して、人をして孟子を尊信し、而して七篇を誦習するを知ら使むるのみ。其れ大道を論じて、曰く、「孔子之を孟軻に伝う」と。

其の間に曾子・子思を算^{ぞく}う。韓子の眼孔頗る大なり。後世の道統の若き硬説(38)に非ず。

学の醇粹、是れ孟子私淑の良なるのみ。乃ち其れ一身の大功にして、孔子の遺沢なるのみ。必ずしも其れ授受の緒を問わざるも、可なり。

〈現代語訳〉

「孟子が子思を師とした」と(韓愈が言うの)は、世間に伝わった根拠のない説による誤りである。「それについては」先にすでに論じた。

道統の説は、韓愈の「王墳を送る序」がその始まりである。しかし、韓愈はだいたい世間に伝わった根拠のない説に従っている。そして、道統の源流を推し量って、人々に孟子を尊信させ、『孟子』七篇を誦習すること(「の重要性」)を知らしめた。「韓愈は」大いなる道を論じて、「孔子が道を孟軻に伝えた」と言う。そして、孔子と孟子との間に曾子・子思を配している。これは韓愈の見識が非常に高いことを示している。後世の学者(いわゆる程朱学派の学者)が説く道統のような紋切り型の説ではない。

「孟子の」学問が純粹であるのは、孟子が孔子に私淑してその良き点を受け継いだからである。それは孟子一身の大いなる功績であって、孔子の遺した恵みである。「孟子の学問の正統性を言うために」必ずしも両者の道統授受の端緒を問う必要はない。

又た曰く、「楊子雲曰く、『古者は楊・墨 路を塞ぐ。孟子は辞して之を闢く。廓如たり』と。夫の楊・墨 行なわれ、正道廃す。〔…〕孟子 賢聖と雖も位を得ず。空言施すこと無し。切なりと雖も何の補あらん。然れども其の言に頼り、而して今の学者、尚孔氏を宗とし、仁義を崇め、王を貴び覇(39)を賤しむを知るのみ。其の大経大法、皆な亡滅し而して救わず、壊爛して収めず。いわゆる十一を千百に存す。安くんぞ其の能く廓如たること在らん。然れども向に孟氏無かりせば、則ち皆な服は左衽、而して言は侏離なりしならん。故に愈嘗て孟氏を推尊して、以て功 禹の下に在らずと為す者は、此れが為なり」と。いわゆる「廓如」は、聖人の道なり。いわゆる「亡滅」「壊爛」なる者は、聖人の制度なり。二者 科を異にす。韓子乃ち捏合して抑揚を資^{あそ}けて、以て其の文勢を奮う。此れ則ち文士の手段なり。深く咎むるに足らず。然れども竟に失言を免れず。

韓子も亦た周制の壊滅を憫れむ。然れども其の言 当を失す。蓋し「十一

(40)の存する者は、其の綱領なり。「千百」の滅ぶ者は、乃ち其の細目なり。然らば則ち「大経大法」は、未だ嘗て「亡滅」「壊爛」せざるなり。仮使孟子 時を得ば、其れ必ず是の綱領振^{ふる}いて、天下を御^{おさ}む。其の細目の若きは、弛張して手に在り。胸中の蘊鬱(41)は、一時に発出して、思い湧泉の如し。凝滞有る無し。「亡滅」「壊爛」、何ぞ憫れむに足らん。蓋し孟子を学ぶ者も、亦た唯だ此れを志すのみ。徒らに壊滅を憫れむを以て為すこと無かれ。

〈現代語訳〉

楊雄の言うように「廓如(明らかであること)」とし「て孟子が残し」たものは、聖人の道である。韓愈が言うように「亡滅」「壊爛」(ともに、滅びること)したのは、聖人の制度である。この二者はカテゴリーが違っている。韓愈はそれを付会して、文章に抑揚をつけることによって、その文勢を奮いたたせ高めようとしている。これはまさしく文章家の手段と言えから、深くとがめだてすることはできない。しかし、結局、失言であることは否めない。

韓愈も周の制度が壊滅することを惜しんでいる。しかし、その言は当を失する点がある。思うに「十の中に一」存するもの、すなわちまだ存している一割はその綱領で、「千の中に百」滅ぶもの、すなわち滅んでしまった九割はその細目である。それならば「大経大法」は「綱領に当たるから」、まだ滅んでいないことになる。もし孟子が時を得ていたならば、必ずこの綱領が力をもつて、天下を治めたことであろう。その細目は、興廃しつつその手の中にあつただろう。孟子の胸中につのつた思いは、一時に發揮されて、その思いは湧泉のようで、とどこおることがなかっただろう。滅んでしまったものは惜しむに足らない。思うに孟子を学ぶ者も、ただ「大経大法」をめざすべきで、徒らに壊滅を惜しんではならない。

○或るひと程子に問いて曰く、「孟子 還た聖人と謂う可きや否や」と。程子曰く、「未だ敢えて便ち他は是れを聖人と道^{みち}わず。然れども学 已に至処に到る」と。【愚按するに、至の字、恐らくは当に聖の字に作るべし。】

至の字 自ら好し。必ずしも改作せず。

〈現代語訳〉

至の字はそのままが良い。「孟子はやはり聖人とは言えないから、朱子の

ように」必ずしも改作する必要はない。

程子又た曰く、「孟子 聖門に功有ること、勝^あげて言う可からず。仲尼 只だ一箇の仁字を説く。孟子 口を開けば便ち仁義を説く。仲尼 只だ一箇の志を説く。孟子 便ち許多の養氣を説き出し来る。只だ此の二字、其の功 甚だ多し」と。

仁と曰い、仁義と曰うは、其の致^{いた}り 一なり。弁説 其の便に任すも、可なり。此れ則ち未だ以て功と為すに足らず。

〈現代語訳〉

「孔子が」仁と言ひ、「孟子が」仁義と言ふのは、ともにめざす点は同じである。それぞれの弁説が、その時々^{とき}の便に任されていても、それは良い。仁義を説いたことはまだ孟子の功績だとするには足りない。

又た曰く、「孟子 世に大(42) 功有るは、其の性善を言うを以てなり」と。称揚すること此くの如し。蓋ぞ服膺して全く諸に遵わざる。

〈現代語訳〉

「程子が孟子を」称揚することはこのよう〔に性善説を説いていることを強調するのみ〕である。どうして「孟子本来の意図を」心によく留めてそれに従わないのだろうか。

又た曰く、「孟子の性善・養氣の論、皆な前聖未だ発せざる所なり」と。

「性善」は孟子の創る所に非ず。但だ其の言の明暢なるのみ。未だ「未発」と称するを得ず。亦た世の変に因るのみ。

〈現代語訳〉

「性善」の説は、孟子が創造したものではない〔その精神は孔子のときにすでに胚胎している〕。ただ、性善説を明確に説いただけである。「孟子以前^{いぜん}の聖人がまだ発したことがない」と称することはできない。「孟子は」世情の変化に従っているだけである。

又た曰く、「学者 全く時を識るを要す。若し時を識らざれば、以て学を言うに足らず。顔子 陋巷自ら樂しむは、孔子の在る有るを以てなり。孟子の時の若きは、世 既に人無し。安くんぞ道を以て自ら任ぜざる可けんや」と。

「学者 時を識る」、尤だ其の精細を要す。顔子 賢なりと雖も、仍^{なほ}是れ人家の子弟にして、方に学を務むるの人なり。年^{わす}厯かに三十を踰えて死す(43)。未だ教を施して世を済うの任に当たらず。孟子 齊・梁に遊ぶは、

年蓋し五十前後ならん。設^{たて}令孟子 彊仕(44) して死するも、亦た竟に出ざるのみ。七篇も亦た作らず。天 若し顔子に寿を錫^{たま}うも、安くんぞ其れ終に出ざるを知らんや。程子の比擬、元もと当を得ず。「孔子の在る有るを以てなり」の一句、未だ以て之を断つに足らず。

〈現代語訳〉

「学ぶ者は時勢を知るべきである」という〔程子の〕語は、とりわけ精細に検討する必要がある。顔淵は賢人であるとはいへ、依然として庶民の子弟の立場で、まさしく学問に励んでいた人である。それがわずか三十歳を過ぎたあたりで亡くなつてしまったために、「孔子の」教えを広めて世のためになるようなことをする任に就くことはできなかった。〔それに対して〕孟子が齊や魏に遊説していたのは、思うに五十歳前後であろう。もし孟子が四十歳で亡くなつていたらとしても、やはり世に知られてはいなかっただろう。また、『孟子』七篇も作られてはいなかった〔はずである〕。天が顔淵に天寿を全うさせていたとしても、どうして世に出ることがなかったと知ることができようか。程子が「顔淵と孟子とを」比べることは、もともと当を得ていないのである。「顔淵が庶民の生活の中で学問を楽しんでいられたのは」孔子がおられたからだ」という〔程子の〕言葉は、顔淵が世に出ることができたかどうかを判断する〔材料〕には不足である。

又た曰く、「孟子 些^{いさ}かの英氣有り。才に英氣有れば、便ち圭角有り。英氣甚だ事を害す。顔子の如きは、便ち渾厚同じからず。顔子 聖人を去ること只だ豪髪の間のみ。孟子は大賢にして、亜聖の次なり」と。或るひと曰く、「英氣の甚^{なん}の処に見わる」と。曰く、「但だ孔子の言を以て之に比すれば、便ち見る可し。且つ氷と水精との如きは、光らざるに非ず。之を玉に比ぶれば、自らはれ温潤含蓄の氣象有り。許多の光耀無し」と。

「英氣甚だ事を害す」、是れ少しく孟子を貶むるの語なり。「甚」は大なり。下文の「甚の処」の甚と同じからず。

程子 「英氣」「圭角」において、稍^{やう}懲創^{ちやう}の意(45) 有り。

程伯子 顔「子」・孟「子」を論ずれば、則ち顔に左袒すること深し。蓋し其の資質近似するを以てなり。未だ以て達論と為す可からず。叔子は則ち家説を守るのみ。

親筆の書、門人の旁記と、勢い同じからざること有り。豈に親筆の精確、

自ら「光耀」を生ずるを以て累と為す可けんや(46)。

〈現代語訳〉

「英気は大いに事を害する側面がある」という「集註序説」に見える程子の言葉は、少しく孟子をけなす言葉である。「甚」は大いに、の意である。下文の「甚の処」の甚とは意味が異なる。

程子は「英気」「圭角」の語をやや懲らしめの意に用いている。

程頤が顔淵・孟子を論じるときは、顔淵に肩入れする傾向が強い。思うに程頤と顔淵との資質が似通っているからであろう。しかし、それは道理の通った説とすべきではない。程頤は「いわゆる程朱学派の」一家の説を守るのみである。

みづから著わした書と門人のノートとは、その文勢が大きく相違する。みづから著わした書が精密で正確であることで自然と光耀を生じることが弊害とするのは正しくない。

○楊氏曰く、「孟子の一書は、只だ是れ人心を正すを要む。人をして心を存し性を養い、其の放心を収め教む。仁義礼智を論ずるに至っては、則ち惻隱・羞惡・辞讓(47)・是非の心を以て之を端と為す。邪説の害を論ずれば、則ち曰く、『其の心に生じ、其の政に害あり』と。君に事するを論ずれば、則ち曰く、『君心の非を格す。一たび君を正し、而して国定まる』と。千變万化、只だ心の正しき来る。人能く心を正しくすれば、則ち事 為すに足る者無し。

言 何ぞ容易ならん。蓋し「心を正す」の後に、大いに工夫有り。七篇中に存す。

〈現代語訳〉

「[人心を正す]ことを説くための」言葉はとても容易ではない。思うに「心を正す」ことの後に「本当は」大いに工夫が必要なのである。その工夫は『孟子』七篇中に見えている。

大学の修(48)身・齊家・治国・平天下は、其の本と只だ是れ正心・誠意のみ。心 其の正しきを得て、然る後に性の善を知る。故に孟子 人に遇えば、便ち性善を道う。

性の善を知るは、即ち亦た「心を正す」の工夫なり。楊氏 魚釜を顛倒す(49)。

〈現代語訳〉

性が善であることを知るの、これもまた「心を正す」ための工夫である。楊時「が心を正してはじめて性の善を知ることができると言うの」は、目的と手段とを履き違えている。「つまり、心を正すことが目的である。」

歐陽永叔却って言わく、『聖人の人を教うる。性 先んずる所に非ず。』と。誤りと謂う可し。

性は、孔子の罕に言う所なり。故に得て聞く可からず。孔子の時、固に自ら此くの如し。欧説「誤りと謂う可」からず。孟子の時に至って、則ち天下に性論紛紜にして、邪説 人を惑わす。故に先に弁ぜざるを得ず。即ち異端を排斥するの第一義と云う(50)。欧の時、更に加うるに道・仏の言を以てす。性論 復た世に紛紜たり。欧も亦た自ら決定すること能わず。故に是の言有り。捨てて理弗く、以て煩を避けんと欲するのみ。頗る龜略(51)なりと雖も、而れども其の聖人を論ずるは、則ち誤り弗し。楊氏の謂る所は、欧の過ちに非ず。而れども欧の失う所は、楊は則ち之を知らず。

〈現代語訳〉

性は、孔子があまり言及しなかったことである。だから、孔子からは「性の説を」聞くことができなかった。孔子の時代は、まことにこのようであった。欧陽脩「が『聖人が人々に教えを説くときには性に関する話題は後回しであった』と言うの」は、まさしく誤りではない。孟子の時代に至って、天下に性に関する議論が紛々として乱れ起り、邪説が人々を惑わせるようになった。従って、「孟子は」先んじて性に関する議論を弁じざるを得なかったのである。そのようなことから、「孟子は」異端を排斥する急先鋒と言われる。欧陽脩の時代は、「異端として」さらに道教・仏教の言が加わった。性に関する議論は再び世に紛々として乱れ起こっていた。欧陽脩も自分で「性に関する議論に」決着をつけることができなかったからこのような言葉を発するのである。「欧陽脩の説は、」道理を捨てて、煩いを避けようとしているだけである。ただ、非常に粗略ではあるけれども、その聖人についての評価は誤ってはいない。楊時が批判する欧陽脩の言は、欧陽脩の過ちとは言えない。しかしながら、「本当に」欧陽脩の言葉の至らないところを楊時はわかっていない。

人性の上に一物を添う可からず。堯舜の万世の法為る所以も、亦た是れ性に率うのみ。いわゆる性に率うは天理に循(52)う是れなり。外辺に計を用い

数を用いれば、^{たうい}仮饒功業を立て得るとも、只だ是れ人欲の私なり。聖賢の作処と、天地懸隔す」と。

此れ是れ宋代復初の説にして、拡充の功を廢する者なり(53)。其の可否は姑く之を舍く。但だ以て七篇の序と為す可からず。

《現代語訳》

〔楊時の〕この言葉は宋代の復初の説であつて、「孟子本来の」拡充の功績を廢するものである。その可否はしばらく論じないでおくけれども、復初の説を『孟子』七篇の序に入れて論じてはならない。

注

(1) 孟子が子思に直接学んだのか、それとも子思の門人に学んだのか、については諸説ある。履軒は門人に学んだ方の説を採る。子思と孟子との生卒年は不詳である。ただ、孟子が活躍していた年代が、梁(魏)の恵王(在位…前三七〇―前三三五)や齊の宣王(在位…前三四二―前三三四)の在位期間(『史記』六国年表による)からおおよそ推定できること(『集註序説』後部の『孟子逢原』において、履軒は、梁や齊に遊説していた頃の孟子の年齢を「年蓋し五十前後ならん」と述べる)と、子思が孔子(前五五一―前四七九)の孫であることを考え合わせると、子思が孟子の直接の師であることは考えにくい。なお、齊の宣王の在位期間について、履軒は独自の立場に立っており、前三三二―前三二四を宣王の在位期間と考えている。その詳細は後述。

(2) 『孟子』中に子思に言及する箇所は確かに存在する。しかし、例えば、公孫丑下篇に「昔者^{むかし}魯の繆公は子思の側に人無ければ、則ち子思を安んずる能わず」などとあるように、子思が魯の繆公に仕えたときのエピソードを紹介する例が多く、孟子が子思に師事したという記事は見えない。

(3) 「流伝」とは、世間に広がり、伝わっていること。履軒は、根拠のない説とのニュアンスをこめている。

(4) 『史記』孔子世家に「孔子 年七十三、以て魯の哀公十六年四月己丑に卒す」とあり、孔子の没年は、前四七九年である。後の『孟子逢原』に「宣王の立つること十九年、燕を伐ちて之を取る」とあり、宣王十九年は履軒の考えによれば前三二四年である。従つて、その間は百六十六年となる。ただ、

「齊 燕を取る」の記事は、実際には『史記』田敬仲完世家には見えない。

履軒には『史記』に関する注解書『史記雕題』(大阪大学附属図書館懷徳堂文庫に履軒自筆本を所蔵。一九九一年に懷徳堂・友の会より懷徳堂文庫所蔵本の影印本が刊行されている)があり、履軒はその田敬仲完世家「十九年、宣王卒す」の箇所「齊 燕を伐ちて之を取るは、大事なり。而れども世家に記さざるは何ぞや」と疑問を呈している。この履軒の説は、瀧川亀太郎の『史記会注考証』の同箇所にも紹介されている。なお、孟子が活躍していた当時の戦国期の諸侯の年代は、『孟子』と『史記』とでは相違している場合が多い。そこから『孟子』の記事を信用する説、『史記』の記事を信用する説が分かれて、諸説紛々である。履軒は基本的に『孟子』の記事を信用する立場である。履軒と同じ立場に、例えば、武内義雄がいる。武内氏は「孟子」(『武内義雄全集』第二巻、角川書店、一九七八年)において、「竹書紀年」を用いて『史記』六国年表の年代の誤りを指摘し、『孟子』の年代が正確であることを指摘している。ただし、武内氏は「六国年表訂誤」(同じく『武内義雄全集』第二巻所収)において、六国年表が孟子の遊梁を恵王の三十五年(前三三六年)とするのは誤りで、恵王改元後の十五年(前三二〇年)とするのが正しいと述べる。

(5) 『史記』孔子世家「伯魚 伋を生む。字は子思。年六十二」の箇所の『史記雕題』に「孔子 卒するより魯の穆公元年に至るまで、正に七十一歳を得。伯魚 孔子に先んじて死す。而して子思の生は其の前に在りて、又た穆公の師友為り。必ずしも其の元年ならず。則ち歳 殆ど八十なり。卒年は蓋し八十左右に在り。此れを六十二と云うは、大いに謬れり」と述べる。この履軒の説も『史記会注考証』の同箇所を紹介される。

(6) 「略論」は、自筆本では「畧論」となっている。

(7) 『孟子』中に『易経』に関する記事は見えない。にもかかわらず、朱子が孟子を「易を知る者」と言うのはなぜか。『周易正義』巻首「第一 易の三名を論ず」に「正義に曰く、…鄭玄 此の義に依りて易賛及び易論を作りて云わく、易は一名にして三義を含む。易簡 一なり、変易 二なり、不易 三なり」(易は一名にして以下は、『周易正義』の同箇所にも引かれているが、もとは『易緯乾鑿度』に見える語。ただし、『叢書集成初編』などに残る『易緯乾鑿度』では「易は一名にして三義を含む」の箇所が見えず、「孔

子曰く、易とは易なり、変易なり、不易なり」とあるのみ」とあるように、「易」の字には、元来、変化の意が込められていた。従って、刻々と変化する時節の状況に対して、「聖の時なる者なり」の語に示されるように変幻自在に対応する孔子の様子を『孟子』が描いていることから「易を知る者」と言うのであろう。ただし、後述するように履軒は、変幻自在なのは孟子ではなく、孔子だと朱子の解釈を批判している。

(8) 「頻頻」は、自筆本では「頻々」となっている。

(9) 例えば、『孟子』梁惠王上篇に、恵王が鴻・鴈・麋・鹿などの鳥獸を眺めながら「賢者も亦た此れを楽しむか」と問うたのに対して、周の文王を賛美した『詩経』大雅、靈台篇と夏の暴君桀王を批判した『書経』湯誓篇とを引きつつ、「賢者にして後 此れを楽しむ」と孟子が答えている。この例をはじめとして『詩経』『書経』を引用する例は『孟子』中に枚挙に遑がない。

(10) 趙岐の「孟子題辭」に見える。

(11) 「卮言」は『莊子』雜篇、寓言篇に見える語。元来は臨機応変に対処する語の意である。しかし、履軒は、朱子や程子が自分勝手な、理に合わない解釈をしていると批判する際によく用いる。なお、『孟子逢原』中では「玩味の卮言」の形でよく用いられる。

(12) 「機鋒」は元来、禅学用語で、言葉の鋭さを指摘する際に用いられる。しかし、履軒は逆に、対象となる言葉が的外れだと批判するときにこの語を使用する。

(13) 「声に吠する」は、『潜夫論』賢難篇「一犬 形に吠して、百犬 声に吠す」から、他に影響されて起こることの譬え。この場合は、尹焞が程子の誤った説に雷同する様子を履軒が批判する。

(14) (7) で述べたのと同様に孔子が変幻自在に時勢に対応しているから、「孔子を謂いて易を知る」と言う。

(15) 『史記』の六国年表では、斉の宣王の即位は、魏の恵王の二十九年となっているけれども、履軒は『史記』の年代を誤りだとする。因みに魏の襄王の三年は前三三二年である。履軒は『史記』孟子荀卿列伝「孟軻は騶人なり」の箇所『史記雕題』に次のように言う。

孔子の卒年（前四七九年）より斉の宣王の三年（前三二九年）に至るまで百五十年を得。子思 縦令^{たひ}寿百歳なるも、亦た孟子の誕期に遭うを得

ず。斉の宣〔王〕の三年、蓋し孟子の中身（五十歳前後）に当たる。

梁恵〔王〕の即位は斉の宣〔王〕の即位の前三十八年（前三七一年）に在り。年齒（年齢）を想えば相遠きに当たる。豈に孟子 先に梁に適き、而る後に齊に適か（ざらんや）。果たして然り、梁恵〔王〕の国を利するの問い、開卷第一に在るは、義において順と為す。魏世家に据れば、孟子 梁に適くは、恵王の三十五年に在り。従う可きに似たり。此れ則ち斉の宣〔王〕 未だ立たず。此の伝は謬りに似たり。斉の宣〔王〕の即位は、魏の襄〔王〕の三年に在り。宣〔王〕恵〔王〕は世に並ばず。また、『史記』魏世家「〔恵王の〕三十五年、斉の宣王と平阿の南に会す」の箇所の『史記雕題』に「宣王の元年は是れ襄王の三年なり。恐らくは恵王と相見えず」とある。

(16) 『孟子』梁惠王上篇に「孟子 梁の恵王に見ゆ。王曰く、叟 千里を遠しとせずして来る。亦た將に以て吾が国を利する有らんとするか」とある記事を目指す。

(17) 前三二四年のことである。

(18) 『史記』田敬仲完世家「：是を以て斉の稷下の学士 復た盛んにして、且に数百千人にならんとす」の箇所の『史記雕題』に「前に稷下を録さずして、此に『復た盛んにして』と記す。蓋し前文に闕有るのみ」とある。上述したように履軒は「斉 燕を伐ちて之を取るは、大事なり。而れども世家に記さざるは何ぞや」と述べており、その理由のひとつとして、履軒は『史記』のこの箇所の闕文を考えていた可能性がある。因みに湣王の死は、前二八三年である。

(19) 「死」の字は、自筆本では青字で附加される。

(20) 『史記』によれば、商鞅・呉起の死は、それぞれ前三三八年、前三八一年である。しかし、孫臏・田忌については、『史記』孟嘗君列伝に「〔斉の〕宣王二年、田忌 孫臏・田嬰と俱に魏を伐ち、之を馬陵に敗る」（『史記雕題』には記事が見えない）とある。斉の宣王二年は、六国年表では前三四一年だが、履軒説に従えば前三三二年であり、孟子が魏に遊んだ梁の恵王三十五年（前三三六年）の時点で孫臏・田嬰は生存しているはずだから、「孫臏・田忌も、亦た皆な既に死す」の内容とは合わない。ただし、『史記』孫子呉起

列伝「魏：斉と桂陵に戦い、大いに梁の軍を破る。後十三歳、魏 趙と韓を攻む」の箇所『史記索隱』に引かれた「竹書紀年」に「梁の恵王十七年、斉の田忌 梁を桂陵に敗る。二十七年十二月に至って、斉の田盼 梁を馬陵に敗る。計りて相去ること十三歳無し」とある。この「竹書紀年」の記事に従えば、馬陵の戦いは梁の恵王二十七年(前三二五年)となり、孫臏・田嬰の生存年代はさかのぼる。このあたりの『史記』の年代についても諸説紛々である。

(21) 韓愈の説は、「張籍に答うる書」に見える。

(22) 「湯」の字は、自筆本では青字で附加される。

(23) 韓愈『原道』の全文ではない。

(24) 「径蹊」は、道筋、こみちの意。

(25) 「也」の字は、自筆本では青字で附加される。

(26) 全書本は「荀」の字を誤って「苟」とする。自筆本に従って改める。

(27) 楊雄の『法言』修身篇に、「人の性や、善惡混ず。其の善を修むれば、則ち善人と為り、其の惡を修むれば、則ち惡人と為る」とある。韓愈の『原性』にも「楊子の性を言う、曰く、人の性は善惡混ず」と紹介される。楊雄が履軒に「儒者の面目を失わず」と評されるのは、『漢書』卷八十七、楊雄伝に、「故に人 時に〔楊〕雄に問う者有れば、常に法を用いて之に応じて誤するに以て十三卷と為し、論語に象りて、号して法言と曰う」とあることによるものであろう。すなわち、楊雄がその主著を『論語』に倣って作成するほど、楊雄の立場が儒家に近いと履軒は考えていた。

(28) 原文の「弗能」は、『中庸』第二十章「学ばざること有り、之を学んで能くせずんば措かざるなり(有弗学、学之弗能弗措也)」を踏んでいる。

(29) 「性を舍く」の語は、『朱子語類』卷五、性理二、性情心意等名義の条の「心を舍いて以て性を見る無く、性を舍いて以て心を見る無し」を踏んでいる。

(30) 「冠冕」の「冠」も「冕」もともに本来はかんむりの意。ここでは第一等であること、最重要であることの意。

(31) 確かに『書経』中には「性」の字は見えない。しかし、『詩経』『易経』『春秋左伝』には若干「性」の字が散見される。ただ、それらの「性」の字に後世の宋学のような善惡に関する性の意はない。

(32) 「偽濫」は、いつわりみだれるの意。

(33) 「孔子の罕に言う」は、『論語』子罕篇「子 罕に利と命と仁とを言う」に基づく。

(34) 「人人」は、自筆本では「人々」となっている。

(35) 「焦唇弊舌」は、くちびるをかわかし、舌を疲れさせることから、辛苦することの意。

(36) 「各」の字は、雕題本では「合」と誤っており、自筆本では「各」に改められている。

(37) 「略」は、自筆本では「畧」となっている。

(38) 「硬説」は、固定的で紋切り型の説の意。

(39) 「覇」は、自筆本では「霸」となっている。

(40) 「十一」と続く「千百」とは、『文選』に見える陸機の「歎逝賦」の「旧要を遺存に顧み、十一を千百に得」が出典。十人のうち一人、千人のうち百人にまで数が減ることを意味する。

(41) 「蘊薈」は、つまたくわえられることの意。

(42) 「大」の字は、自筆本では黒字で附加される。

(43) 顔淵は孔子の門人。孔子は顔淵に大いに期待をかけていたが、早世した。『史記』仲尼弟子列伝に「回 年二十九、髪 尽く白し。蚤く死す」とある。『論語』雍也篇にも「孔子(哀公に) 対えて曰く、顔回なる者有り。学を好み。怒りを遷さず。過ちを弋びせず。不幸 短命にして死せり。今や則ち亡し。未だ学を好む者を聞かず」と述べられる。

(44) 「彊仕」は、本来、四十歳で仕官することの意。ここでは、単に四十歳の意として用いられる。出典は『礼記』曲礼上篇「四十を強と曰う。而して仕う」。

(45) 「懲創」は、こらしめるの意。

(46) 「親筆の書」以下の文章は、自筆本では欄外に記されている。

(47) 「辞讓」の字は、自筆本では欠落している。全書本では補われており、恐らく全書本を編集した安井小太郎が附加したのであろう。

(48) 「修」の字は、自筆本では「脩」となっている。

(49) 「魚釜を顛倒す」とは、魚をとらえるための伏籠、わなをさかさまにすること。すなわち、手段と目的とを履き違えて誤解することの意。

(50)「異端」は、『論語』為政篇「子曰く、異端を攻むるは、斯れ害あるのみ」とあるように、儒教以外の非正統の説のこと。

(51)「略」の字は、自筆本でも「略」とある。

(52)「循」の字は、自筆本では青字で附加される。

(53)「復初」は朱子学の基本用語で、人間の中に初めから備わっている完全な善を回復させること。しかし、履軒は人間の中に備わっているのは完全な善ではなく、善の素質であり、その素質を「拡充」させることこそめざすべきだとの立場である。この履軒の基本的立場については、拙稿「中井履軒の性論における仁斎学の影響——「拡充」の語をめぐる——」（『中国研究集刊』霜号、二〇〇七年）を参照。

『孟子逢原』原文（関儀一郎編『日本名家四書註釈全書』第十卷所収）

孟子逢原

水哉館学

集註序説

○史記列伝曰。孟軻【趙氏曰。孟子。魯公族孟孫之後。漢書注云。字子車。一説。字子輿。】騶人也。【騶亦作鄒。本邾国也。】受業子思之門人。【子思。孔子之孫。名伋。索隱云。王劭以人為衍字。而趙氏注及孔叢子等書亦皆云。孟子親受業於子思。未知是否。】

門人非衍字。然推其年紀。孟子受業之人。亦不得親受業於子思也。若孔氏之人。則子思之孫。方得為孟子之師耳。諸家親受之説皆謬。且七篇中。全無所述。而曰私淑諸人。則亦無常師也。史記亦錄流傳之言耳。非有明拠。按世家年表。自孔子卒。至齊取燕。得百六十六年。是時孟子既入于老境矣。而子思之生。在孔子卒之前。子思非壽踰百歲。不能遭孟子之誕降矣。亦安得而師之。

道既通。【趙氏曰。孟子通五經。尤長於詩書。程子曰。孟子曰。可以仕則仕。可以止則止。可以久則久。可以速則速。孔子聖之時者也。故知易者莫如孟子。又曰。王者之迹熄而詩亡。詩亡然後春秋作。又曰。春秋無義戰。又曰。春秋天

子之事。故知春秋者莫如孟子。尹氏曰。以此而言。則趙氏謂孟子長於詩書而已。豈知孟子者哉。】

孟子雖略論春秋。而易無一言。又七篇中。援詩書頻頻。義又尽精微。故趙氏曰。通五經。尤長於詩書。非謂他經不通也。尹氏謂之。非也。夫程子玩味之卮言。稍有機鋒。難以為正解。尹氏則吠聲者。豈知孟子者哉。

仕止久速。聖之時。是孔子之事矣。孟子追述之耳。正与論語無適無莫。無可無不可合。則謂孔子為知易。可也。而孟子弗与焉。若拠此称孟子為知易。則是孟子推易理。用褒贊孔子之德也。豈有是理乎哉。機鋒卮言之害於事如此。

游事齊宣王。宣王不能用。適梁。梁惠王不果所言。則見以為迂遠。而闊於事情。【按史記。梁惠王之三十五年乙酉。孟子始至梁。其後二十三年。当齊湣王之十年丁未。齊人伐燕。而孟子在齊。故古史謂。孟子先事齊宣王後乃見梁惠王襄王齊湣王。独孟子以伐燕為宣王時事。与史記荀子等書皆不合。而通鑑以伐燕之歲為宣王十九年。則是孟子先游梁而後至齊見宣王矣。然考異亦無他拠。又未知孰是也。】

按世家年表。齊宣王即位。当魏襄王三年。則宣王与惠王。不並世矣。世家惠王三十五年。孟子至梁。是先適梁。後適齊也。則梁惠利国之間。在開卷第一者。於義尤順。

孟子見梁襄王。次于梁惠章之下。是惠王死。而襄王立之時也。然則孟子去梁。在于襄王之世也。

宣王立十九年。伐燕取之。至于燕入齊。湣王死。三十有一年矣。蓋取燕之後。宣王死。而湣王立也。如此事勢尤順。世家年表。蓋皆謬耳。後人承其謬。反致疑於七篇之書。非也。

孟子著七篇。蓋在其末年。則齊梁諸諡。皆可紀矣。非後人所加。

当是之時。秦用商鞅。楚魏用吳起。齊用孫子田忌。天下方務於合從連衡。以攻伐為賢。而孟軻乃述唐虞三代之德。是以所如者不合。退而与万章之徒。序詩書。述仲尼之意。作孟子七篇。【趙氏曰。凡二百六十一章。三万四千六百八十五字。韓子曰。孟軻之書。非軻自著。軻既没。其徒万章公孫丑相与記軻所言焉耳。愚按。二説不同。史記近是。】

按商鞅死。在于孟子適梁之前二年矣。吳起則在前四十五年。孫臏田忌。亦皆既死矣。伝文不切當。

七篇孟子之自著。無容疑焉。万章之徒。恐不能贊一辭。韓說無徵。註不當采入。

○韓子曰。堯以是傳之舜。舜以是傳之禹。禹以是傳之湯。湯以是傳之文武周公。文武周公傳之孔子。孔子傳之孟軻。軻之死。不得其傳焉。荀與楊也。扞焉而不精。語焉而不詳。【程子曰。韓子此語。非是蹈襲前人。又非鑿空撰得出。必有所見。若無所見。不知言所傳者何事。】

原道全文。是字承上文仁義之道而言。其義明白。無怪謬可迷。程子乃言。所傳何事。可怪。蓋徒摘誦是數句。而玩味焉。扞言由此而出耳。非達論也。且其機鋒可厭。

又曰。孟氏醇乎醇者也。荀與楊。大醇而小疵。【程子曰。韓子論孟子甚善。非見得孟子意。亦道不到。其論荀楊則非也。荀子極偏駁。只一句性惡。大本已失。楊子雖少過。然亦不識性。更說甚道。】

斯言無可非也。荀雖偏駁。而大抵執仁義之說。比之老莊申韓。不亦愈乎。謂之醇亦可。偏駁其疵也。而性惡疵之首也。大小以其多少分數而言。醇七八而疵二三。是也。學者或謬解。大醇為至醇。故多疑焉。

楊雖性說不明。而大抵不失儒者之面目。與刑名五行之異端大異。故亦得醇名耳。

二子雖性說有差。若他說皆合于孔孟之道。斯可也。唯其弗能焉。故不足尚耳。其弗合。亦非必以性說之差也。程子言。更說甚道。頗過當。据是語也。是堯舜孔子之道。舍性之外。無可言也。豈其然哉。堯典臯陶謨。為尚書之冠冕。而無一性字。古詩三百篇。亦無性字。易六十四卦。亦無性字。春秋二百四十年。亦無性字。可知不題性字。道亦有可明者也。但偽濫之書。傳註之文。乃多論性。豈足尚哉。但孟子論性。則有大功。當別論。

夫性。孔子所罕言。非人人而語之也。蓋以不識性。亦無大害故也。後世學者。焦唇弊舌。朝夕論性。恐非善學孔子者也。

又曰。孔子之道。大而能博。門弟子不能偏觀而盡識也。故學焉而皆得其性之所近。其後離散。分處諸侯之國。又各以其所能授弟子。源遠而未益分。惟孟軻師子思。而子思之學。出於曾子。自孔子沒。獨孟軻氏之傳得其宗。故求觀聖人之道者。必自孟子始。【程子曰。孔子言參也魯。然顏子沒後。終得聖人之道者。曾子也。觀其啓手足時之言。可以見矣。所傳者子思孟子。皆其學也。】

師子思。是流傳之謬。前已論之。

道統之論。發嚆矢于此。然韓子。略遵流傳之說。而推其源流。使人知尊信孟子。而誦習七篇而已。其論大道也。曰孔子傳之孟軻。其間不算曾子子思也。韓子眼孔頗大。非若後世道統硬說。

學之醇粹。是孟子私淑之良已。乃其一身之大功。而孔子之遺澤云爾。不必問其授受之緒。可也。

又曰。楊子雲曰。古者楊墨塞路。孟子辭而闢之。廓如也。夫楊墨行。正道廢。孟子雖賢聖不得位。空言無施。雖切何補。然賴其言。而今之學者。尚知宗孔氏。崇仁義。貴王賤霸而已。其大經大法。皆亡滅而不救。壞爛而不收。所謂存十一於千百。安在其能廓如也。然向無孟氏。則皆服左衽。而言侏離矣。故愈嘗推尊孟氏。以為功不在禹下者。為此也。

所謂廓如。聖人之道也。所謂亡滅壞爛者。聖人之制度也。二者異科。韓子乃捏合而資於抑揚。以奮其文勢。此則文士之手段。不足深咎焉。然竟不免於失言。

韓子亦憫周制之壞滅也。然其言失當。蓋十一之存者。其綱領也。千百之滅者。乃其細目矣。然則大經大法。未嘗亡滅壞爛也。假使孟子得時乎。其必振是綱領。而御于天下矣。若其細目。弛張在手。胸中之蘊蓄。一時發出。思如湧泉。無有凝滯。亡滅壞爛。何足憫焉。蓋學孟子者。亦唯志于此而已。無徒以憫壞滅為也。

○或問於程子曰。孟子還可謂聖人否。程子曰。未敢便道他是聖人。然學已到至處。【愚按。至字。恐當作聖字。】

至字自好。不必改作。

程子又曰。孟子有功於聖門。不可勝言。仲尼只說一箇仁字。孟子開口便說仁義。仲尼只說一箇志。孟子便說許多養氣出來。只此二字。其功甚多。

曰仁。曰仁義。其致一也。弁說任乎其便。可也。此則未足以為功。

又曰。孟子有大功於世。以其言性善也。

稱揚如此。盍服膺而全遵諸。

又曰。孟子性善養氣之論。皆前聖所未發。

性善非孟子所創。但其言之明暢而已。未得稱未發。亦因世變已。

又曰。學者全要識時。若不識時。不足以言學。顏子陋巷自樂。以有孔子在焉。若孟子之時。世既無人。安可不以道自任。

學者識時。尤要其精細。顏子雖賢。仍是人家子弟。方務學之人矣。年僅踰

三十而死。未當施教濟世之任也。孟子游于齊梁。年蓋五十前後矣。設令孟子疆仕而死。亦竟不出耳。七篇亦不作也。天若錫顏子壽。安知其終不出哉。程子比擬。元不得當。以有孔子在一句。未足以斷之。

又曰。孟子有些英氣。才有英氣。便有圭角。英氣甚害事。如顏子。便渾厚不同。顏子去聖人只豪髮間。孟子大賢。聖之次也。或曰。英氣見於甚處。曰。但以孔子之言比之。便可見。且如水與水精。非不光。比之玉。自是有溫潤含蓄氣象。無許多光耀也。

英氣甚害事。是少貶孟子之語。甚大也。与下文甚處之甚不同。

程子於英氣圭角。稍有懲創之意。

程伯子論顏孟。則左袒於顏深矣。蓋以其資質近似也。未可以為達論矣。叔子則守家說而已。

親筆之書。与門人旁記。勢有不同。豈可以親筆之精確。自生光耀。為累哉。○楊氏曰。孟子一書。只是要正人心。教人存心養性。收其放心。至論仁義禮智。則以惻隱羞惡。辭讓是非之心為之端。論邪說之害。則曰。生於其心。害於其政。論事君。則曰。格君心之非。一正君。而國定。千變万化。只說從心上来。人能正心。則事無足為者矣。

言何容易。蓋正心之後。大有工夫也。存於七篇中。

大學之修身齊家。治國平天下。其本只是正心誠意而已。心得其正。然後知性之善。故孟子遇人。便道性善。

知性之善。即亦正心之工夫矣。楊氏顛倒魚筌。

歐陽永叔却言。聖人之教人。性非所先。可謂誤矣。

性。孔子所罕言。故不可得而聞也。孔子之時。固自如此。歐說不可謂誤矣。至於孟子之時。則天下性論紛紜。邪說惑人。故不得弗先弁焉。即排斥異端之第一義云。歐之時。更加以道仙之言。性論復紛紜於世。歐亦不能自決定。故有是言。欲舍而弗理。以避煩也已。雖頗龜略。而其論聖人。則弗誤也。

楊氏所誦。非歐之過。而歐之所失。楊則不之知。

人性上不可添一物。堯舜所以為万世法。亦是率性而已。所謂率性循天理是也。外辺用計用數。假饒立得功業。只是人欲之私。与聖賢作處。天地懸隔。

此是宋代復初之說。而廢擴充之功者。其可否姑舍之。但不可以為七篇之序矣。